

## 付篇2 古代和泉と海会寺

石 部 正 志

### 和泉国の成立

大阪府の南部は今も「和泉」とか「泉州」という呼称で親しまれている。『泉州ナンバーの車は運転が荒っぽい!』などとも言われ、この地域の人情の、庶民的でありながら、半面、芳しからぬ一面をも持っているやの代名詞ともなっているのである。このようになじみ深い「和泉＝泉州」という地名も、それほど古くさかのぼるものではない。元々、大阪湾（茅渟海）の東岸一帯は、いつの頃からか、漠然と、「茅渟」と総称されてきた<sup>①</sup>。それが、いつから「和泉」と言われるようになったのか。

「和泉」という国名は、古代の国家権力によって、天下り的に決められたのである。日本古代国家は、ようやく7世紀末に成立した。国家が成立すると、それまでの氏族制的秩序に代わって、行政区域単位で天皇の国家に掌握されることになった。全国は60余の「国」に分けられ、国内の土地と人民は、中央から派遣された国司によって統括されることになる。それらの国々は、畿内と七道のいずれかに包括された。畿内は大和・山背(山城)・摂津・河内・和泉の5箇国で構成されるが、大鳥・和泉・日根の3郡は、初めのうち河内国の南部に含められていた。尤も、このような国郡制が成立するのは、701年、大宝律令制定以後のことである。それ以前、7世紀中頃以降、郡の前身をなす「評」制がまず行われた。従って、和泉を3つのブロックに大別する作業も7世紀後期には進められていたであろう。そして、このような行政区域設定の作業と並行して、この地域の初期の古代寺院である海会寺などの創建も着手されていたのである。

716年、元正天皇の行幸に先立ち、離宮造営の必要から、河内国の3郡を割いて、和泉監が設置された<sup>②</sup>。そして珍努宮＝和泉宮が建設され、数次にわたって元正天皇・聖武天皇らが訪れたらしい<sup>③</sup>。「和泉」の語源は豊富な清水が湧きだす場所に因むものである。それは今日、史跡「和泉清水」がある泉井上神社付近(和泉市府中町)、つまり後世の国府と同じ場所か、そのごく近隣に求められている。和泉監はこのように天皇の行幸に備えて臨時に設けられた機関であったから、その役目が終わった740年には廃止され、3郡はもとの河内国へ戻された<sup>④</sup>。ところがその後、藤原仲麻呂(恵美押勝)政権の地方行政充実強化政策の一貫として、757年、和泉国が能登国などとともに正式に分立されたのである。しかし、その頃<sup>⑤</sup>



には、既に海会寺の堂塔は、建立されて後約1世紀を経て、古色を帯びた荘重なたたずまいを示していたはずである。

## 海会寺創立前史

### 弥生文化と農業共同体の成立

海会寺が創立された7世紀中期は、考古学の時期区分からすると、古墳時代後期末の段階<sup>⑥</sup>に相当する。海会寺がどういう性格の寺かを明らかにしようと思えば、古墳時代の和泉、とくに泉南地域の歴史動向と、古代国家形成へ向かっての、全国、とりわけ畿内全般の歴史動向を把握しておく必要がある。日本の社会が無階級の原始社会から階級社会へ転化し、やがて古代天皇制専制国家を確立するに至る出発点は、弥生文化＝水稻農耕文化の生成にあった。和泉の弥生文化も前期以来順調に発展したことは、多くの諸遺跡の分布と、数々の発掘調査によって実証されている。泉北地方の四ツ池遺跡<sup>⑦</sup>(堺市)、池上曾根遺跡<sup>⑧</sup>(和泉・泉大津市)は大規模な集落遺跡として有名であるが、泉南地方でも船岡山東遺跡<sup>⑨</sup>(泉佐野市)などで、弥生前期の資料の出土をみており、三軒屋遺跡<sup>⑩</sup>(泉佐野市)や男里遺跡<sup>⑪</sup>(泉南市)は中期の集落遺跡として知られている。

中期末～後期になると、旧来の立地環境とは趣を異にする鈴の宮<sup>⑫</sup>(堺市)、惣の池<sup>⑬</sup>(和泉市)、観音寺山<sup>⑭</sup>(同)、どぞく<sup>⑮</sup>(岸和田市)、オドリ山<sup>⑯</sup>(泉南市)、滑瀬<sup>⑰</sup>(同)などの諸遺跡が丘陵・台地上に点々と出現する。これらの集落遺跡を子細に点検すると、個々の遺跡はそれぞれ特有の個性を持っており、一概に一つの性格だけではくれないのであるが、いずれも要害堅固な高所を選んでいる点が共通している。

水田稲作農耕を基幹産業とする弥生人が、敢えてこのような高所に集落立地を求めたのは、2～3世紀当時の西日本が動乱の世紀であったことと無関係ではない。高所の集落は、他集団からの攻撃に備えた砦であり、見張り場(狼火場)であったと考えられるのである。農業の発展と金属器(特に鉄器)の加工と、その利用の普及は、社会全般の生産力を高め、人口を増大させた反面、集団間の不均等を助長した。各種の生産財と高度の手工業技術の獲得を巡って、人々の間の対立抗争を不可避としたのである。

弥生時代の生産技術水準はまだ極めて低いものであったから、弥生人は小家族単位で自立して生計を営むことは到底不可能であった。互いに血縁関係で結ばれた複数の人々が緊密な共同体を構成し、助けあって生きていたのである。しかし、弥生社会が発展してくると、共同体自体も単純なものではなくなってくる。幾つかの小共同体が、地縁的にそれらを包括する、より大きな共同体の単位集団に化して行っただと考えられるのである。こうし



て、いわゆる農業共同体が形成されるのだが、その実像を、和泉の弥生社会に即して具体的にみてみよう。

### 大津川の左岸地域

和泉地方では、大津川を挟む両岸一帯が比較的良く調査されているので、この地域を取り上げて説明することにした。大津川左岸は、一部が忠岡町と和泉市に属するが、大部分は岸和田市の領域である。ここでは、弥生前期に、まず海岸砂堆とその周辺に加守三昧山や春木天の川遺跡が現れ、山手側でも田治米宮内遺跡が出現する。弥生中期になるとその中間の今日の第2阪和国道沿いに栄ノ池東、下池田、箕土路遺跡などが現れる。拠点的大集落といえる程の大遺跡は見られないけれども、海岸部・平地部・丘麓部と、立地環境を違えて重層的に遺跡が分布しているのが大津川左岸の特徴である。後期になると、大津川(槇尾川)本流に接する和泉丘陵上に観音寺山遺跡が、支流の牛滝川左岸の丘陵上にどぞく遺跡が出現する。どぞく遺跡は部分的な発掘しか行われていないが、観音寺山の方は住宅団地造成工事に際して、100棟以上の竪穴住居址とそれらを大きく取り巻く断面V字形の環濠が発見されている。両遺跡とも弥生時代の集落としては極めて規模が大きい。この両遺跡は準高地性の集落でもある。そして、ちょうどその中間の丘陵端部に、奈良盆地を除外すれば、畿内最大の前期前方後円墳である摩湯山古墳がやがて営まれるのである。<sup>⑬</sup>

摩湯山古墳は、東山丘陵の先端部を利用して築かれるのであるが、この辺りを谷口部として西南方へ牛滝川が開いた山直の谷平野が入り込んでいる。川の右岸に沿って和泉の古道の一つである牛滝道が走り、沿道には近世以来の集落が連互している。この谷に府道磯之上・山直線が敷設されることになった。その事前調査の結果、谷口部付近から谷のかなり奥まで、弥生・古墳時代以後各時代の遺跡が、途切れることなくちゅう密に分布していることが明らかにされつつある。この一帯の地名である「山直」の音が、「邪馬台」に通ずることから、ヤマタイ国に擬定する人もいるが、勿論、それは語呂合わせの付会に過ぎない。しかし、山直という地域名で一括される区域が弥生以来有数の遺跡の集中地であることは注目されてよいことである。この地区出身の首長が、少なくとも大津川左岸一帯を包括する農業共同体の大首長の地位を獲得したのは2～4世紀の段階であったと考える。

何故、そう考えるかというと、牛滝川を挟んで、谷口部に観音寺山、どぞくの2大準高地性集落遺跡があるからである。先述したように、大津川左岸の弥生中期の遺跡は海岸部から山手にかけて重層的に分布している。その中に格別大規模な拠点集落は認められないのがこの地域の特色である。このような集落分布では、各集落(単位集団)間に利害の対立が生じた場合の調整が難しかったと推察される。水田開発が進み、人口が増加してくると、「水」の問題が一番深刻になる。和泉のように、瀬戸内気候帯に属し、段丘地形を基底とす



る環境では、排水よりも利水が問題である。水位が低い牛滝川本流などは用水として無価値であったろう。周囲の谷間から流れ出し、本流とは無関係に、それと並行して流れる小流(例えば天の川)こそ、弥生人への恵みの神であった。下池田や栄ノ池東遺跡では、こうした自然水路が実際に発掘で明らかにされている。<sup>⑳</sup>

上流に「しがらみ」が作られたりすれば、細流の水はたちまち枯れて、下流へは届かなくなる。水源である上流の山々は木材資源の宝庫でもある。下流の平地部では弥生時代の間、自然林の伐採が急速に進んだらしい形跡があるから、その点でも、下流の人々の上流への依存度は高くなったと思われる。このように、地域の利害が深刻な場合には、調停役の首長の権威が強くなければ、内部矛盾によってその共同体は崩壊を余儀なくされる。逆に言えば、深刻な内部矛盾は、政治的力量に卓越した強力な大首長を輩出する動機ともなる。内部矛盾を緩和する有力な手段は、いつの時代にも常に外交である。

弥生後期になって、観音寺山、どぞくという砦のような拠点大集落を、山直谷口部へ集中させたのは、この地域から大首長が推戴された証しであるとともに、他集団に対する軍事体制の拡充整備がなされたことを示している。激しい動乱が終息した後、巨大前方後円墳摩湯山が両大集落の中間に築かれるのは、歴史的必然性があったのである。

### 大津川右岸の弥生社会

では、大津川右岸の弥生社会の発展はどのような経過をたどったであろうか。遺跡の分布密度や数は、左岸とあまり差はみられないが、それらの中で池上曾根遺跡が卓越した規模を有するのが右岸の大きな特徴である。二重の大溝で囲まれた中期の居住区の範囲は、1986年度の調査結果から、従来の想定より幾分縮小しはなくなったが、依然、拠点的大集落であることに変わりはない。同じ年度の調査で、中期末頃、旧大溝の外に、新たに、深く鋭く掘りこまれたV字溝が掘削されていたことが確認されたので、その頃に大津川右岸も緊張が高まっていたことが実証された。<sup>㉑</sup>この池上曾根遺跡を中核的母村として、次第に分村が増加してゆくのであるが、これに匹敵する規模の集落はみられない。

後期になると、1キロばかり東方の信太山台地上に惣の池遺跡が出現する。大津川右岸最大の準高地性集落であるが、その成立は観音寺山より遅れ、存続期間も短かったようである。観音寺山のような環濠(V字状断面の空堀)は発見されておらず、遠方への展望もありきかない惣の池遺跡の立地環境は、軍事的機能を殆ど感じさせない。

以上を要するに、右岸は左岸の社会に比べて、どちらかというと牧歌的であり、平和的であったように感じられるのである。それは集落群の構成が、拠点と分村という関係にあったからであろう。共同体の中核機能、つまり首長は常に池上曾根におり、単位集団間の利害の対立も深刻ではなく、調停もしやすかったに違いない。



大津川の下流右岸は、元来幾つもの分流が西北へ流れていたらしく、伏流水も豊富であった。「和泉清水」のことは前に述べたが、今日の和泉市府中町付近から池上曾根にかけては、少し掘削すると湧き水が出る地点が多い。この点でも右岸は恵まれていたのであり、拠点大集落を経営出来たのもそのお陰であったといえよう。後世、和泉国の中心地になるのも同じ理由によるところが大きい。ただし、洪水の被災率は左岸より高かったであろう。

弥生末の動乱が終わると、右岸にも前方後円墳が築かれた。丸笠古墳と黄金塚古墳（和泉市）である。しかし、これらは摩湯山古墳に比べると、4分の1かそれ以下の規模に過ぎない。この相異は何を意味しているのだろうか。恐らく、丸笠などは、池上曾根を中核としていた旧大津川右岸の農業共同体を、ほぼそのまま踏襲した程度の領域を統括した首長であったのである。それに対し摩湯山は、大津川左岸の農業共同体連合の首長であると共に、その政治勢力を背景として、少なくとも和泉地方全域の諸首長の上に立ち、諸所の共同体連合をさらに統括した大首長の墓であったと考えられる。深刻な内部矛盾を処理する努力の積み重ねによって、政治的力量を高めていたからこそ、和泉地方最初の大首長の栄冠を、大津川左岸の首長は勝ち取ることが出来たのであろう。

#### 古墳文化の展開

摩湯山の後継者の墳墓は久米田貝吹山古墳である。和泉の前期古墳としては第3位と、依然として大規模ではあるが、摩湯山に比べれば一回り小規模化しているのは、大津川左岸の勢力に陰りがみえはじめた表れと解せられる。代わって大首長の地位を獲得するのは、石津川河口の勢力であった。百舌鳥乳の岡古墳の登場である。南河内の古市古墳群とともに、日本の中期古墳群を代表する百舌鳥古墳群は大小約100基余りの古墳で構成されているが、特に規模の傑出する古墳は8基数えられる。そのうち最初に築かれたと考えられるのが乳の岡である。後続する7基とは立地を異にし、百舌鳥野の台地より一段低い河口の微高地を選んでいてこの古墳の特徴がある。

対岸のすぐ間近か（浜寺船尾町）には、池上曾根と並ぶ弥生時代以来の拠点大集落四ツ池遺跡があり、弥生終末期以降には船尾西遺跡や石津遺跡がある。伝統的な在地の集落群に隣接して築かれているのは、乳の岡古墳がこの地域出身者の墓であることの傍証になるであろう。かつては、乳の岡の北方の砂堆上に長塚山、松塚などが点在していたらしい。これらの実態は、今となっては不明とせざるをえないが、立地的には乳の岡と類似する点があるので、同じく百舌鳥古墳群の中では古く位置づけられる前方後円墳かも知れない。

それはさて、乳の岡に葬られた首長に、系譜上後続すると思われる首長墳は、台地上の百舌鳥大塚山古墳である。その規模は乳の岡にほぼ匹敵するものであったと推定されるが、消滅して今はない。大塚山の次ぎは、イタスケ古墳か石津丘古墳であるが、後者は後円部



直径が208メートルもある巨大古墳である。続いて、御廟山と大山が営まれる。大山は、径242メートル、2重の周堀(部分的には3重)を巡らし、面積では日本一の大前方後円墳であり、5世紀中頃の造営と考えられる。5世紀の後期に入ると、ニサンザイ古墳が古墳群域の東南部に造られる。これらの巨大古墳は、約8キロ東方に展開する古市古墳群の仲ッ山・誉田山両墳とともに、『宋書』にみえる「倭の五王」に比定される大王の墓と考えられる。<sup>29</sup>百舌鳥野に大王墳が登場するのと即応して、和泉のその他の地域においては前方後円墳の新規の築造が一時中断する。

先に、弥生時代の社会について概述した大津川左岸地域は、摩湯山一久米田貝吹山の後は、風吹古墳という径約50メートルの帆立貝形古墳に変わり、以後も円墳しか見られなくなる。<sup>30</sup>大津川右岸では丸笠古墳に続くのは信太千塚群集墳の中の大形の円墳(玉塚・目塚・王塚など)である。黄金塚の後続首長は帆立貝形の信太貝吹山古墳に葬られたものと思われる。このような現象が一斉に起こったのは、和泉地方のほぼ全域が古市・百舌鳥古墳群を営んだ大王政権の直轄地に組み込まれたからに違いない。地域首長達は、首長としての独立性を失い、大王に奉仕する官僚的豪族としてのみ存続を許されるに至ったのであろう。石津川を挟んで、その左岸に分布する浜寺四ツ塚古墳群は、一基(赤山)は早く失われて規模も年代も明らかではないが、中規模の方墳(塔塚)は5世紀の中頃過ぎに編年され、小形前方後円墳(経塚)は6世紀初期に築かれたものである。『延喜式』や『新撰姓氏録』など後の記録によると、この付近には大鳥連が奉祭する大鳥神社があることから、大鳥氏一族の首長墳である公算が高いが、大鳥氏は連の姓を有することから、大王に奉仕する伴造氏族であったことは明らかである。古市や百舌鳥古墳群自体も、群内に中小古墳を数多く伴っており、ピラミッド型の官僚秩序が形成され始めていた様相が読み取られるのである。

## 泉南と和歌山

### 古墳分布の希薄な泉南

ところで、海会寺がある泉南地方は、昔は和泉国日根郡の管轄区域とされた一帯であるが、不思議なことに古墳が至って少ない。貝塚市地藏堂の丸山古墳以南には、<sup>33</sup>阪南町までの間、一基の前方後円墳も認められない。丸山は現在は単独で所在するが、実は削平されてしまった古墳群の盟主墳であつたらしく、近年の発掘調査で、方墳等が発見されており、中には5世紀代まで上がる古墳も含まれている。ただし、主墳の丸山は6世紀前期に下るのではないかと想定される。貝塚市に南接する泉佐野市と熊取町には、はっきりした古墳が知られていない。<sup>34</sup>泉南市には兎田・新家古墳群などがあるが、いずれも規模の小さな後



期の小群集墳ばかりである。阪南町にも玉田山古墳群<sup>③⑤</sup>などがあるが、量的にも質的にも目立った古墳は認められない。

泉佐野市には三軒屋遺跡等が、泉南市には男里、オドリ山、滑瀬遺跡等の弥生時代以来の集落があるのであるから、泉南地域に人が住んでいなかったわけではない。泉南市の向井山遺跡からは弥生中期の方形周溝墓と推定される遺構が発見されている。その地点は海会寺の東方の丘の上であり、向井山から海会寺付近にかけて弥生以来の集落址が埋蔵されている可能性も濃いのである。

泉南地方は古墳時代の遺跡が確かに少ないのであるが、それ以後はどうであろうか。『延喜式』の神名張には和泉国全体で62座の神々が登載されている。そのうち日根郡は10座に過ぎない。その他の52座は大鳥・和泉両郡にあることからみても、和泉の南部は氏族分布も人口も、北・中部よりは少なかったらしい。しかし、日本の初期寺院としては有数の内容と規模を誇る禪興寺(泉佐野市長滝)や、わが海会寺が造営されたことも忘れてはならないことである。

元来、和泉は南へ行くほど、山が海に接近し、平地は狭くなる。北部に比べると、人間の生活領域が狭いものだから、人口容量が小さいのは当然である。その平地も海面よりかなり高い段丘面が卓越するので、大がかりな池溝の開発がなされた中世より以前においては、耕地面積も限られていたであろう。泉南で最も広々とした農地が今も見られるのは泉佐野市の日根野である。しかし、その素晴らしい田園風景は中世に行われた開発の賜物であって、古代には大部分が不毛の原野であつたらしい。尤も、「日根野」の地名は『日本書記』にも登場するのであり、これについては後で述べたい。

### 淡輪古墳群と紀伊の大首長

大阪府下でも最南端の岬町は、和泉山脈が海に迫り、猫の額ほどの小平地が僅かにみられるに過ぎないにも係らず、泉南では例外的に古墳が多い。中でも、淡輪地区の西陵古墳<sup>③⑦</sup>と淡輪にさんざい古墳は、畿内でも有数の巨大古墳である。後円部直径約 115メートルの西陵は、中心埋葬施設が長持形石棺であることが分かっているほかは、内部の状態は知られていないが、5世紀前半～中頃の造営と考えられている。淡輪にさんざい古墳は、やや遅れて5世紀中頃ないし、第三4半期頃に築造された古墳であろう。後円部直径は西陵より少し小さいが、前方部がよく発達した堂々たる外観を呈している。両巨墳のちょうど中間に西小山という大円墳がある。<sup>③⑧</sup> 竪穴式石室から武器武具等を数多く検出したことで名高い古墳である。淡輪にさんざいとほぼ同時期と考えられる。

これらの3墳から採集されている埴輪には著しい特徴がある。いずれも穴窯で焼成されたものであること。成形に際し、須恵器と同じようなたたき技法を用いていること。竹ヒ



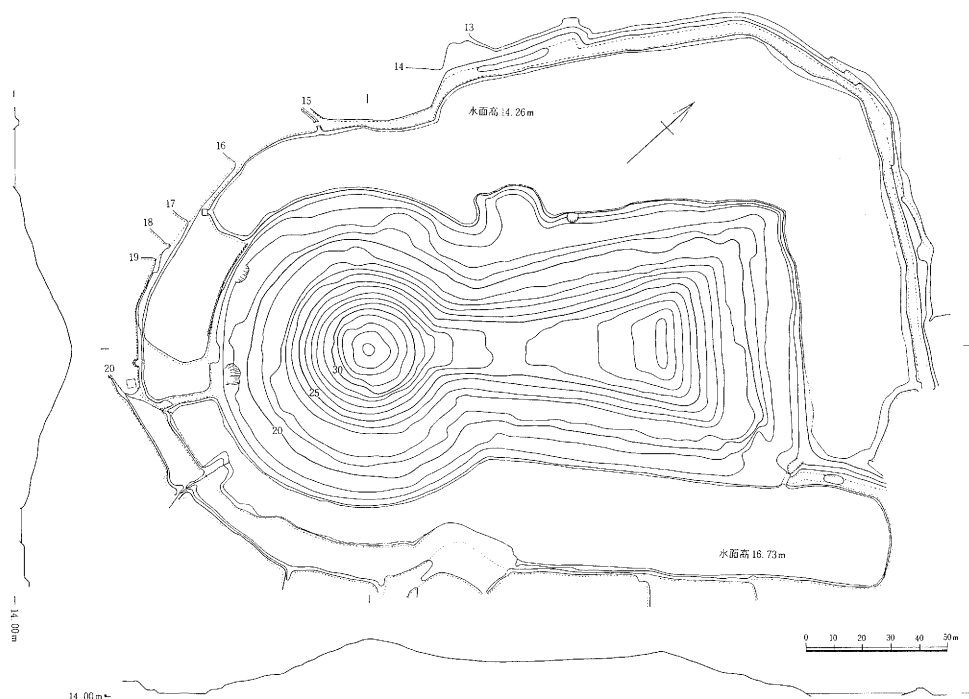


図2 大阪府西陵古墳の墳丘(註③より転載)

ゴなどを編んだものと思われる輪台によって、底径の揃った円筒埴輪を能率よく生産する工夫を行っていること。この3点が、畿内の普通の埴輪にはみられない淡輪の埴輪の特色である。加えて、その胎土は紀の川北岸産の土を使用ないし加えているという。

淡輪にさんざい古墳は、イニシキイリヒコノミコトの宇度墓として、宮内庁管理下にある。垂仁天皇の皇子と伝えるこの人物は、実在したとすれば4世紀の人でなければならない。5世紀でも新しい淡輪にさんざい古墳が、彼の墓でないことはいうまでもない。彼が住んでいたという川上宮は、阪南町の玉田山付近とされているが、この皇子はまた、大和の石上神宮とも関係深い人物である。石上は物部氏と関係が深い神社である。このことから推測すると、5世紀末か、恐らく6世紀に入って、和泉の南端付近まで、一時物部氏の勢いが強く及んだことが、この地域に架空の皇子の名を結びつけることになった真の理由であるかも知れない。

それよりも重要なのは、雄略朝に朝鮮へ派遣された将軍の一人とされる紀小弓宿祢の墓が、淡輪に造られたという伝承である。妻の吉備上道采女大海の悲しみに同情した雄略が、大伴室屋大連に「おまえは、小弓宿祢と同じ国の、近い隣人だから墓を造ってやれ」と命じたという話である。登場人物達が実在したか、架空の物語りに過ぎないのか、それもわからないが、これはこれで、重要なヒントを我々に投げかけてくれる。今、西陵古墳のほとりに、「紀小弓の墓」の碑が建っているが、淡輪の3墳のどれかが小弓の墓であるとすれば、



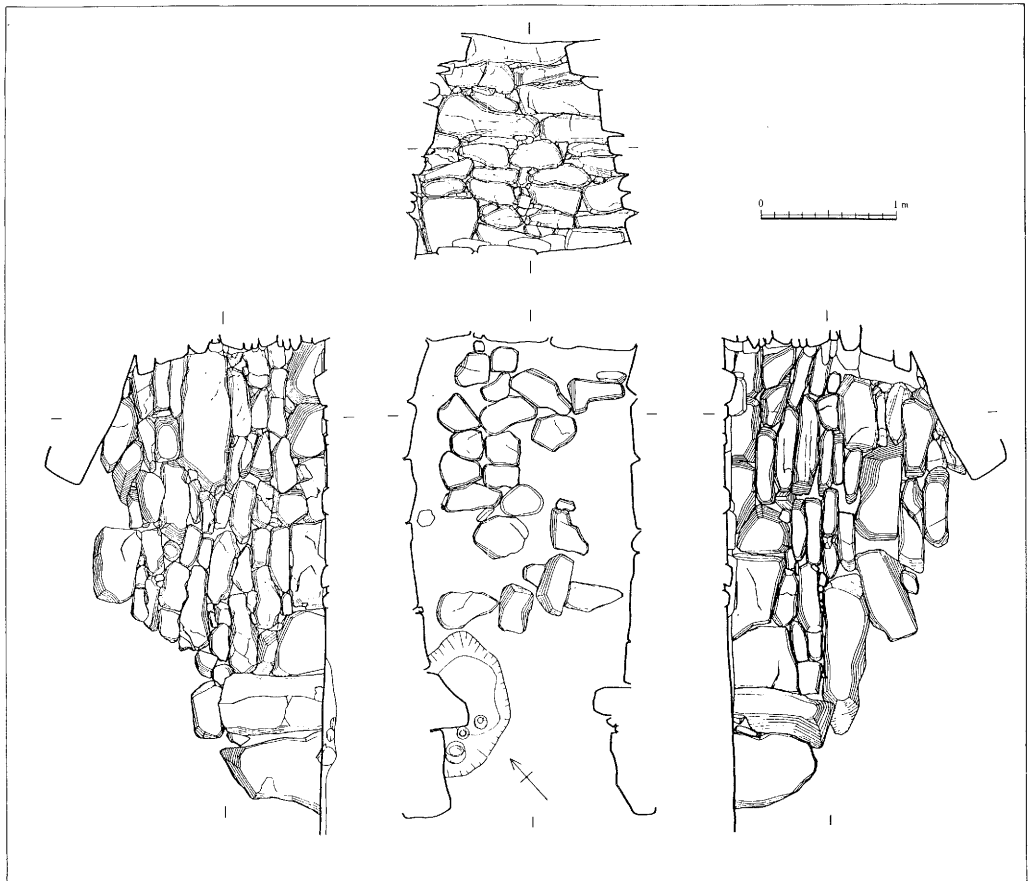


図3 大阪府鴻ノ巣山古墳の石室（註⑪より転載）

西陵よりも、淡輪にさんざい古墳か西小山古墳のほうが、年代観の上からは近いと思われる。なお、淡輪には9世紀初頭、平安朝の中央貴族紀氏の地歩を築いた紀船守も葬られており、彼を祭る船守神社もあり、この社のことは『土佐日記』にもみえる。

以上を要するに、淡輪付近は考古学的にも、古代史料の上からも紀伊、つまり、和歌山平野との関係が深かったのである。古墳時代後期、6世紀代に入っても、白峠山古墳など、非畿内的様相を濃厚に持つ小首長墳(円墳)があり、鴻の巣山古墳群や、みどり山古墳群、磯山古墳群等の群集墳が目立って多いのも岬町の古墳文化の特徴である。尤も、5世紀末には淡輪地区での大首長墳の継続的築造は途絶する。元々、紀伊の大首長の最初の本拠地は、淡輪から孝子峠を南へ越えた紀の川右岸の山麓付近にあったらしい。阪和線「六十谷」駅辺りから、西方にかけて注目すべき遺跡が集中している。

大谷古墳は、輸入品と考えられる馬兜・鎧や杏葉などを出土して名高い<sup>⑫</sup>。石棺や副葬品の内容は、極めてユニークであるが、山麓の尾根端を利用した、さして規模の大きくない前方後円墳である。大谷古墳を盟主墳とする晒山古墳群や後期の鳴滝古墳群<sup>⑬</sup><sup>⑭</sup>の存在にも注



意しておきたい。大谷古墳の眼下にある楠見遺跡からは、伽耶からの舶載品かと推定され

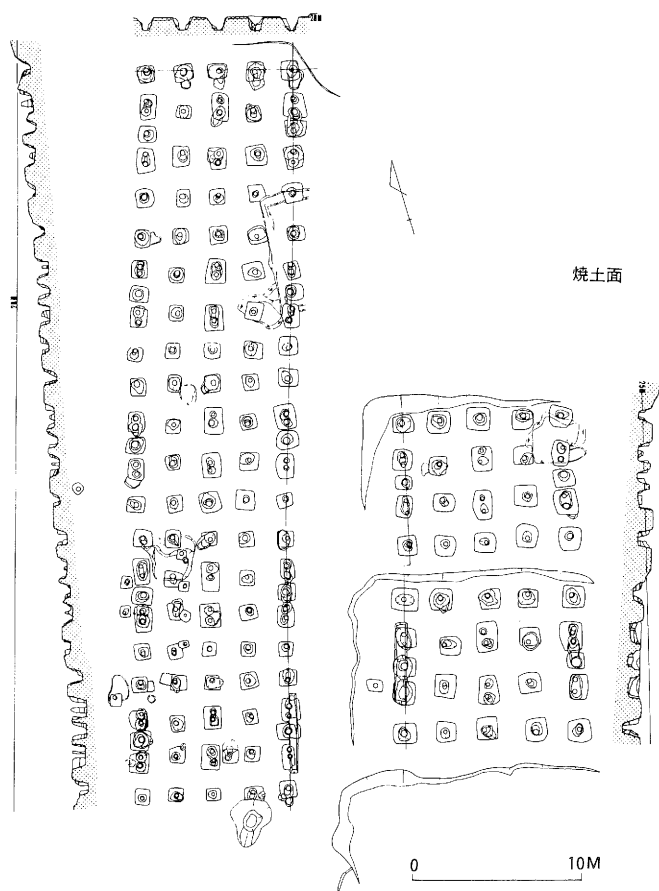


図4 和歌山県鳴滝遺跡の倉庫群  
(註<sup>46</sup>文献より転載)

る陶質土器(初期須恵器)<sup>45</sup>が出土している。鳴滝遺跡からは整然と配置された5世紀初め頃の大形倉庫群が発掘されており、ここからも初期須恵器<sup>46</sup>が出ている。六十谷出土と言われる家形陶質土器も有名である。特に、鳴滝の倉庫群は、この付近が紀伊の大首長の本拠地であり、その権威は5世紀初頭頃には確立していたことを端的に傍証してくれた。また、一帯の遺跡・古墳から朝鮮色の濃い遺物が大量に出土することは、紀伊の首長が対外関係で重要な役割を果たしていたことを具体的に証明するものである。

和歌山平野には黒田太田遺跡を始めとして、弥生時代以来の集落が、紀の川の両岸ともに数多く分布しており、地域社会の発展は畿内各地と比べてもそれほど遜色があったとは考えられない。にもかかわらず、前期古墳は皆無に近い。僅かに、黒田太田に隣接する秋月遺跡の発掘調査で、古墳発生期の小形の前方後円形周溝墓(SX01)が発見されているだけである。<sup>47</sup>近江をはじめ、概して東日本各地においては、古墳の成立に先行して、方形周溝墓群の中に混じって、前方後方形周溝墓が現れ、あるいは前方後方墳が、その地の最初の古墳として出現するケースが目立つ。この点、秋月SX01が前方後円形を呈していることは大変注目される。

元稲荷古墳(京都府向日市)のように、前方後方墳が最初に築かれる地域もあるにはあるが、前期でも特に大形の古墳は、初めから前方後円形をとるのが、むしろ畿内の特色である。秋月SX01もその点では畿内的なのだが、規模が小さいことと、方形周溝墓群の中の



一つであるという点において、なお、弥生墓制そのものであり、古墳への脱皮を十分果たしているとはいえないものである。SX01の造営以後も、5世紀後半まで、秋月遺跡では<sup>④9</sup>方形周溝墓が造り続けられている。同様のことは、畿内でも、例えば、長原遺跡（大阪市）などで指摘されることであるから、これだけをもって、和歌山の古墳文化の発展が遅れていたとみるわけにはいかない。むしろ、4～5世紀を一貫して、こういう墳墓群が平野の中央部に存在することは、弥生以来その土地に住みついていた人々によって、和歌山平野の開発が進められてきた証しになる。

しかし、彼らはついに、4世紀の間、古墳らしい古墳を造らなかった。和歌山の社会の発展は、畿内に比べてやはり停滞的であったのかも知れない。さもないと、遅くとも3世紀末に大形の前方後円墳を生み出した大和との政治的関係が、初期には比較的疎遠であったのだと考えられる。このような経過をたどってきた和歌山（紀伊）の首長が、5世紀に入ってから、突如、西陵古墳を筆頭に、前方後円墳の築造を開始した契機は何であったのだろうか。モダンな色彩が極めて濃厚なことからすると、4世紀末頃、大陸（恐らく南朝鮮）から渡来した氏族集団の一派が、和歌山平野に入植したことによって、壮麗な古墳文化が一挙に開花したのではないとも考えられる。その際、大首長権を掌握した人物とその一族が、渡来系の人達で占められたか、在来の土着氏族の有力者であったかは、考古学の上からは、なお即断出来ない。しかし、淡輪の巨大古墳が、古市・百舌鳥古墳群の大王墳と同様の、発達した前方後円墳を採用した点に、当時の政治情勢を知る重要なポイントがあることは疑いない。

4世紀末～5世紀初頭頃、和歌山（紀伊）の部族同盟体大首長は、畿内の大王に従属的に連合しつつ、そのことを通じて、自己の支配領域内における専制体制を確立したのである。同時に、大王の政治的、軍事的、経済的欲求を充足する尖兵として、西日本各地並びに、朝鮮への軍事、外交を主担し、それによって自らの地歩の伸長を図ったのである。大王と和歌山の大首長との関係を、分かりやすく、平たく表現すれば、今日のアメリカと日本のようなものであったと言えよう。尤も、和歌山に大王の軍事基地などは置かれていなかったであろうから、淡輪の巨大古墳に葬られた王者の政権のほうが、より自立性、主体性を保持していたとみられる。このような大王と和歌山の大首長との関係は、後者の前者への一方的な従属といったものではなく、相互に鋭い対抗関係をはらんだ緊張した関係であったとみるべきである。

#### 緩衝地帯であった泉南

百舌鳥古墳群は大王の墳墓群の一つであった。それと約50キロを隔てて、和泉の最南端に淡輪古墳群が常まれたことこそ、両勢力の緊張した関係を如実に示しているのである。



和歌山には4世紀を通じて古墳らしい古墳が造られなかったことは、先に述べたとおりであるが、近木川以南の和泉南部もまた、有力な前・中期古墳は皆無である。その点では、泉南は和歌山平野と共通しているわけであるが、中期以降も古墳が極めて乏しいのはなぜであろうか。思うにそれは、泉南が両勢力の支配領域のはざまであったからではなかろうか。言い換えると、両勢力の外延地帯であったからではなかろうか。

『日本書紀』に面白い記事が見られる。「允恭天皇は藤原衣通郎姫という美女を愛したが、後の嫉妬が激しいので、姫を日根野の茅渟宮へ移し、しばしば通ってきては、そこで遊獵した」という話である。今、泉佐野市上之郷に茅渟宮跡という伝承地があって、碑が建っているが、勿論、根拠があつてのことではなかろう。第一、允恭紀の記事そのものが史実として信じられるようなものではない。では何が面白いのかと言うと、大王自らが日根野で遊獵したということである。ある時期、日根野が大王の狩猟のための禁野であつたことを示唆している。王者の狩猟は単なるスポーツではない。軍事演習と示威とを兼ねる重要な行事であつたと考えられる。それが誰に対するものであつたかは、もはや言うまでもないであろう。

「雄略紀」の今一つの記事を紹介しよう。「坂本臣の祖である根使主は、かつて、大草香皇子が所有していた押木玉纒という装身具を横領していた。そのことが発覚して雄略の軍勢に追い詰められた根使主は、日根野に逃れ、稲城(応急の砦)を築いて抵抗したが、結局滅亡した。」という話である。別の所伝では、坂本臣は紀臣と同祖されている。和泉市坂本町付近が同氏の本拠地と考えられ、奈良前期建立の禪寂寺(坂本寺)<sup>50</sup>跡が残っている。また、和泉最大の群集墳信太千塚の一角でもある。この群集墳では後期でも有力古墳だけが横穴式石室を採用しているが、その玄室内には紀の川流域産の緑色結晶片岩製の箱形石棺が納められている。<sup>51</sup>同じ、信太山の聖神社1号墳の石室玄門の構造も畿内の一般的横穴式石室とは趣を異にするものである。<sup>52</sup>

根使主の話は、有名な吉備氏の反乱伝承とも関連があるとみられているが、「清寧即位前紀」の星川皇子の乱では、星川やその母吉備稚媛の側に与した城丘前来目が焼き殺されている。<sup>53</sup>和歌山の有力首長の一角もまた雄略によって攻略されたものと推測される。

大王に抵抗した根使主が紀氏と同族関係を持ち、その子孫が和泉市付近を本拠としていたということは、上述した大王と和歌山勢力との関係を象徴的に物語っていると言えるのではなかろうか。和歌山との密接な関係は、6世紀になっても後の和泉郡付近まで及んでいたのである。

和泉の諸河川は、総て和泉山脈に端を発し、西北へ流れて大阪湾へ注いでいる。これらの河川が形成した谷筋毎に、古代以来の間道が走っており、峠を越えて紀の川流域の各所



へ通じている。和泉と紀伊は腹背の関係にあり、どの道を選んでも容易に交通出来るわけである。神武東征の神話が、いつ創作されたかは知らないが、茅渟(血沼)の海が大阪から和歌山への海運の道として活用されたのは、縄文時代からのことであつたであろう。神話に出てくる「雄の水門」(港)は泉南市男里(男里川河口部)であろうとする考えが有力である。ところが、その場所は「紀の国の雄の水門」とも書かれている。この表現から、和歌山側に雄の水門を求めるのも一つの考えであるが、むしろ、和泉の南部までが、かつては、紀の国と呼ばれる領域の一部をなしていたからこそ、雄の水門が紀の国に有りと表現されたのだと見た方が良いのではなかろうか。

歴史地理的世界の各々の広がりや、時代とともに目まぐるしく変化する反面、時代を越えて再生産されることもしばしばある。特に、国家成立後に天下りの決定された行政区画が、その国家の衰退に伴って、地方行政の単位として機能なくなると、古くからの人文自然的領域が息を吹き返す現象はしばしばみられるのである。また、そうした現象が地方行政へ反作用を及ぼすこともある。中世前期、和泉国には南北2箇所に守護所が置かれたことがあるが、いま述べたことの具体的な実例になるかも知れない。

中世末期には、紀伊の根来寺が一大勢力を誇るようになるが、それに伴って和泉の南部もその影響下に置かれることになったようである。この勢力を駆逐したのは、信長と秀吉である。信長は反抗する者を徹底的にたたきのめしていったが、本願寺とは優勢な局面を切り開きつつも、なお、和睦せざるをえなかった。彼は、和泉の多くの寺社を容赦なく、焼き払って行つたらしいが、他方では泉穴師神社へ石燈籠を寄進するなど、現地民への慰撫にも腐心している。天下をほぼ手中に収めた秀吉の最大の土木事業が大坂城築城であつたことはよく知られているが、実は、この工事が進捗しだした頃になつても、和泉の中南部では、激戦が続けられていたのである。主戦場は泉大津から貝塚・泉佐野市付近であつた。この戦は、最終的には根来寺攻めで終結するのであるが、近畿では、一番最後まで、秀吉に抵抗した地域が和泉から紀伊にかけてであつたことは銘記するべきであろう。

### 紀伊勢力の後退

話を元へ戻そう。淡輪の巨大前方後円墳は結局2基だけで終わり、淡輪にさんざい古墳に続く巨墳はついに築かれなかった。強いて、後継首長の墓を求めれば、和歌山市大谷古墳ということになる。この古墳の内容の斬新さは先述したとおりであるが、山丘の末端の尾根を利用したその墳丘は、淡輪の2大古墳に比べれば、みすばらしい。その位置も、大首長の生活の本拠であつたと思われる紀の川北岸へ移動している。このような現象は、紀伊の最高首長が、5世紀末の時点になると、相対的自立性を失い、大王政権へ屈服したことを物語っている。この頃になると、紀伊の部族同盟内部で、新たに自己主張する勢力が



台頭し、これも旧大首長の地位を脅かしたようである。

即ち、紀の川南岸の和歌山平野に向かって突出した花山の上にも、中期にさかのぼる前方後円墳がみられるのであるが、この系譜がこれから6世紀にかけて急成長してくるのである。岩橋千塚古墳群の形成である<sup>⑤</sup>。花山から大日山・大谷山・前山・井辺前山・寺内等の支群に別れて、総数八百数十基の古墳が密集し、一大壯観を呈する。大部分は円墳であるが、主に、主稜線上を選んで、後期の前方後円墳が連なってみられるのは、岩橋千塚の大きな特色である。これらの前方後円墳をはじめ千塚内の有力古墳は、板状の緑色結晶片岩を積み上げた、岩橋型といわれる独特の極めてユニークな横穴式石室を構築している<sup>⑥</sup>。古墳の基数が多いのと、幾つかの支群に分けられることから、ここに葬られたのは一家系の人々ではなく、麓の平地を生活と産業の基盤とする各氏族の有力な家長層が、競って古墳群を営んだ情況を示しているものと考えられる。

数は多くないが、北岸にも鳴滝古墳群などがあり、紀の川のさらに上流や、貴志川流域にも点々と古墳群が分布し、和歌山平野もまた、後期群集墳の時代を迎えたのである。ただ、その中で、岩橋千塚のみに、前方後円墳が集中してみられることは、紀伊の部族集団内にあって、ヘゲモニーを握ったのが、紀の川下流南岸を本拠とする族長層であったことを示している。ここは弥生時代以来有力な遺跡があった場所であり、前方後円形周溝墓が発見された秋月遺跡の近くには、後世、紀国造家が代々奉祭した日前宮もある。このことから、在地に定着した最有力首長は、6世紀以降は、大王に帰属して地方を治める官僚的豪族に転化したものと考えられるのであるが、引き続き前方後円墳を営み、独特の横穴式石室に葬られている点は見過ごすことが出来ない。等しく、国造といっても、大王政権への隷属性には強弱があったのであり、和歌山の場合は、相対的自律性を後まで強く存続させたことが、その古墳文化の質量から推測されるのである。

以上のように、畿内の周辺にあって、極めて独自性の高い一大勢力を誇ったのが紀伊であったが、それと、大王の直接支配領域とのはざまに位置し、両勢力の緩衝地帯ないし、争奪の焦点ともなってきたのが和泉の中南部であった。土地が狭あい、水田適地に必ずしも恵まれないという地理的条件も加わって、泉南地域は人口もやや希薄であったらしいが、政治史の上からは軽視出来ない地域であったと思う。幾多の興亡の歴史が、この地域にも陰を落としていると考えられる。その証拠を、考古学の上から証明することは難しいので、文献史から若干の考察を行ってみよう。

### 中央大豪族と和泉

紀伊の政治勢力の和泉への波及については既に述べたので、大王政権側の動向に絞って概述しよう。5世紀末～6世紀初期に伴造的豪族の筆頭として台頭した大伴氏は、難波の



沿岸部に拠点をもっていたらしい。「大伴の御津(三津)」という地名、失脚した大伴金村が難波の別業に隠棲したという伝承などが、それを傍証する。大阪市内の上町台地上には、現存する帝塚山古墳など以外にも、消滅した有力古墳がなお幾つかあったことを堀田啓一氏は紹介している<sup>57)</sup>。また、百舌鳥古墳群内の巨大古墳以外の有力古墳の中にも、あるいは大伴氏関係のものがあるかも知れない。紀小弓宿祢の墳墓造営記事のところで、大伴室屋が「同じ国、近き隣の人」と呼ばれていたことも注目される。この話は、後の和泉国の領域に、紀氏も大伴氏も、共に深く係っていたことを如実に物語っている。この両氏は、朝鮮遠征でもしばしば共同行動をとり、もしくは競合していた形跡がある。

大伴氏の衰退後、まず頭角を現すのは物部氏である。この物部氏も和泉に勢力を扶植した。例えば、複姓氏族の一つに物部二田連というのがいるが、本拠は泉大津市の二田町付近であろう。物部氏など畿内の大豪族が、地方の中小氏族と擬制的血縁関係を結んで勢力を伸長して行く過程で作られたのが、こうした複姓氏族である。物部氏は6世紀末に討滅されるが、守屋大連に最後まで奉公した資人に捕鳥部万がいた。彼は、妻(婦)の家がある茅渟県有真香邑まで逃れ、奮戦の末に敗死している。岸和田市の天神山丘陵の上に「捕鳥部万之墓」と彼の愛犬の「義犬塚」の石碑がある。近世後期に土地の国学愛好家が建てたものであり、根拠は薄弱であるが、後期群集墳の上に建てられているのは面白い。

この辺りは畑町(岸和田市)・半田(貝塚市)の地名が今も残っており、半田廃寺もある。和泉の秦氏の本拠地であったことは疑いない。万の婦も秦氏だったのではなかろうか。もとより秦氏は渡来氏族であるが、蘇我系の王子である聖徳太子との関係が深かったと言われる。和泉のいま一つの秦氏は日根郡の鳥取郷、つまり今日の阪南町付近に定住したらしい。しかし、ここは鳥取郷なのだから、本来は和泉の捕鳥部の本拠であったと考えられる。捕鳥部万にまつわる伝承を勘案すると、秦氏が日根郡南部に当たる土地まで進出したのは物部氏滅亡後のことであり、この入植には蘇我氏の息が相当かかっていたのではないかと推測される。要するに、和泉の中南部が、次第に大王の直接支配領域に組み込まれ、ついには河内国の一部に編入されるまでの過程で、大伴・物部・蘇我などの大豪族が北から南へ徐々に手を伸ばし、紀伊の勢力との関係を断ち切るとともに、現地の諸氏族を手なづけ、あるいは解体して、古代国家権力の統制下に置いていったと考えられるのである。

## 海会寺建立

### 古墳に代わった古代寺院

6世紀末～7世紀前期の時点では革新的豪族であった蘇我氏と、渡来系有力氏族の秦氏



などの影響が波及すると、泉南の地域にも飛鳥文化の薫りが漂い出すのは時間の問題であった。しかし、在地氏族が新文化を主体的に受け入れるにはもう少しの時が必要であった。

645年のクーデターに蘇我氏を倒した中大兄皇子政権は、難波に遷都したものの、白村江での惨敗後、667年には近江大津宮へ都を遷してしまう。和泉は一時は首都圏から遠ざかったのである。だが、それはつかの間のことで、672年の壬申の乱の結果、大海人皇子が勝利し、飛鳥浄御原宮に即位して天武天皇となる。この乱では、地方豪族の多くが、天武側について奮戦した。坂本臣財は中でも有名であるが、その他にも、大海人に与した中小首長は多かったに違いない。彼らは古い共同体秩序が存続する限り、うだつが上らない立場にあったが、さりとて自力だけでは在地首長としての基盤を確立することも、中央政界へ進出することも困難であった。むしろ、中大兄(天智天皇)が強力に推進し始めた中央集権化政策に翻弄されて、中小首長としての存立も危うくなりだしていた。彼らは、まず、中大兄政権に与しようとし、次いで、大海人の決起をチャンスとしてとらえ、これに呼応していたのであろう。

論功行賞は冠位や姓を与え、評司などの官職に任命することであったと思われる。それと並んで、中央からの技術援助によって、氏族寺院の建立を許すことが、地方首長達の新たな栄誉とされるようになったようだ。一般の民衆さえも後期群集墳に葬られだした6世紀後期以降になってくると、古墳祭祀はもはや首長の権威を保障する道具建てとしては十分な機能を果たせなくなってきたと思われる。古墳に代わるイデオロギーとその物質的道具建てとして、仏教の導入と本格的寺院の建立が有効であることに、最初に気づいたのが蘇我氏やその血脈をひく聖徳太子であった。6世紀末に飛鳥寺がまず造られ、7世紀に入ると四天王寺や法隆寺(若草伽藍)が建てられる。さらに7世紀中期～後期に入ると、山田寺や川原寺が大和飛鳥の文化的色彩を豊かにしたのである。

### 海会寺の創建

海会寺の堂塔の軒先を最初に飾った軒丸瓦は山田寺式と川原寺式のものに限られる。山田寺式の中には、四天王寺のものと同じ型板を用いたものがみられる。ということは、7世紀代の天皇の権勢のシンボルであった中央官寺(国家的大寺院)造営の技術が、海会寺創建のために、貸し出されたことを物語っている。禅寂寺(坂本寺)も同様であったが、こちらは、後続する各時期の瓦を出土するのに対し、海会寺のほうは、8世紀代の瓦が殆どみられないのは何故か。建立氏族が坂本氏であることが確実な禅寂寺に比べて、檀越がだれであったか全く明らかでない点が海会寺の難点である。氏族名が明らかに出来ないのは、この寺の建立者が、壬申の乱に際し、大海人に積極的に加担しなかったため、天武・持統朝になると冷遇され、史書に名を残しえなかったからかも知れない。その五重塔が摂津の



伊丹廃寺にも匹敵する壮麗なものであったことは、出土した水煙の断片などからも明らかであるのに、寺の元の名前も氏族名もわからないのは、歴史の勝者の側に便乗しそこなった一つの悲劇を物語っているのかもしれない。

だが、海会寺は、創建されたままの状態を極めて良好に今日に伝え残すことが出来た。そこが海会寺跡の最も価値ある点であると思う。史跡整備を目標にして進めた今次の一連の調査によって、海会寺は二つの顕著な特色をもっていることが分かった。一つは、今述べたように、古代国家中枢の寺院建築技術がストレートに導入されていることである。他の一つは、それにも係らず、地方色が著しいことである。塔と金堂が接近し過ぎる配置、寺域が完全な東西一町には満たないやや変則的な地割りであつたと思われる点、軒先瓦は丸瓦に限られ、軒平瓦が見られないこと、基壇が河原石積み化粧であることなどは、大和飛鳥の寺院などとは趣を異にするのである。

和泉の初期寺院は、海会寺とほぼ同時期か少し遅れて、7世紀後期には10箇寺以上が偉容を競い合っていたらしいが、いずれも同様の特徴が認められるようである。このように、地方色も濃いことは、建立の主体者が天皇や中央貴族ではなく、地域の有力者であったことを物語っている。尤も、和泉の古代寺院は二つの類型に分けられそうである。一つは、寺域がほぼ方一町で、やや変則的な設計をとる海会寺の類である。今一つは、和泉寺（和泉市）のように、整然とした方二町の寺域を有するものである。後者は、郡寺の性格を有し、前者は有力氏族の氏寺だと、広瀬和雄氏は推定している。氏寺といっても無原則に建てられたのではなく、郷単位に一寺を郷長クラスの者が建立したのではないかと推測されている。即ち、それらは郷寺の性格を持つものではなかったかと考えられている。とすれば、海会寺は日根郡嘸呷郷の範囲内にあるから、嘸呷郷寺であった可能性が大きい。

日根郡の郡寺は泉佐野市長滝の禪興寺廃寺であろう。これもまた、広瀬和雄氏の教示によると、この付近には3～4町四方にもわたる南北の方面地割りの痕跡が認められるという。この地割りは、禪興寺だけでなく、ここに郡衙も置かれていたことを示唆する。しかし、一帯は削平が著しいらしく、基壇の跡なども明らかではない。その他の和泉の古代寺院跡のいずれも、海会寺ほど良好な遺構は遺していないのである。ここに海会寺の史跡としての重要性があると言えよう。

### 古道と海会寺

古代寺院は、幹線道路沿いに位置する場合が多い。和泉の古代の幹線は南海道である。だが、南海道自体は、現在のところ、考古学からは明らかにされていない。ただ、中世の熊野大道は、南海道そのものではないにせよ、それを踏襲している部分もあつたに違いない。海会寺付近では、熊野大道の推定路が二通り想定されている。海会寺の西北方に、厩





図5 和泉国の古代寺院分布図

戸王子跡の伝承地があって、石碑が里道の傍らに建っている。新家川へ下る河岸段丘の上縁に当たる地点であり、川を徒渉した熊野詣での一行が、一服するにふさわしい場所かと思われるが、王子跡の伝承にどれだけの信ぴょう性があるかは、発掘調査しなければ、即断出来ない。厩戸王子跡伝承地を通過する道が孝徳朝以降の南海道であったとすれば、海会寺はこの幹線の東側に少し離れて営まれていたことになる。

他方、現在も地方道として自動車交通にも利用されている道路が、海会寺がある一岡神社の前面をかすめてその東側を迂回している。海会寺の南大門前を通過するこの道筋のほうが幹線道路としてはふさわしいように思われる。昔の旅では河川の徒渉が想像以上に厄



介であったし、洪水などのたびに渡河地点を変更する必要も起こったであろうから、川に近い海会寺からその北方にかけては、古道にもしばしば変動があったと見るのが、実際的だと思う。いずれにせよ、古道が海会寺付近を通過していたことは間違いない。海会寺の南方は信達市場である。ここは中世には泉南きっての交易と宿泊の拠点であつたらしく、町並みがいまにその面影をよく伝えている。古代の噺歌駅はこの辺りに求めるのが最も妥当であろう。

## 海会寺炎上

### 古代地方寺院の荒廃

海会寺跡調査で印象深かったのは、赤くやけただれた創建瓦の膨大な出土であつた。その状態については、第6章で詳しく記述されている通りなので、再説はしないが、実におびただしいものであつた。塔・金堂・講堂等が一举に炎上した際の、凄まじい火災を、くっきりとまぶたに浮かべることが出来る。では、いつ焼け落ちたのであろう。その年次を的確に知りうる証拠は、見つからなかったが、9世紀中頃か、遅くとも9世紀末までのことではなかったかと思われる。海会寺のことかどうかは分からないが、『日本霊異記』中巻第22に、和泉国日根郡に銅盗人がいて、郡内の<sup>カシエ</sup>尽恵寺の仏像を盗んで仏罰に当たったという記事がある。もしかすると、これこそ海会寺にまつわる話であり、尽恵寺こそ、元来の寺名であつたかも知れない。同じ話は、『今昔物語集』にも見える。恐らく、実際にあつたことが下敷きになって出来た話なのであろう。そして、このような話が遺されたのは、8世紀末になると、古代寺院の中には、管理が行き届かない荒れ寺も現れ出していたことを示唆する。

今次の調査では、倒壊した塔跡の瓦に混じって、かなりの青銅器片が発見された。風鐸・水煙・九輪など、いずれも断片であるが、かなりの量が出土している。仏像は塑像や埴仏だけで、金銅仏はみられなかったが、瓦の下積みになったため盗りそこなったともみられる状態で、上述のような断片が出土したのである。雷火か、放火か、はたまた失火によるものか定かではないが、一度に崩れ落ちた壮麗な伽藍は、しばらくはそのまま放置されていたようである。

そして、平安時代後半以降のある時期から、同じ場所に一岡神社が祭られ、泉南の有力社として尊崇されるようになったらしい。ただし、明瞭な神社跡の遺構は確かめられなかった。恐らく、神社とセットをなしたと考えられる寺院が復興するのは、平安末になってからであつたらしい。少なく見積もっても、9～10世紀の相当長期間は、寺らしい寺がない状態が



続いていたと思われるのである。このように、古代寺院が9世紀頃に一旦廃絶し、11世紀頃になって、再興されるケースは和泉では大変多い。これが、この地域の特色であった。

### 古代地方寺院建立の意味

古代寺院は9世紀になると衰微し、海会寺のように一旦炎上した寺は、しばらくは復興もされなかったのはなぜであろうか。古代の仏教は国家仏教であった。寺院を建立すること自体が政治的営為そのものであった。地方の有力者は郡司や郷長に選ばれると、その資格において、禪興寺や海会寺を造営することを許されたのだと考えられる。天皇の政府とそれを構成する中央貴族達は、技術援助をし、地方の有力者を国家権力に緊密に結びつけ、そうすることによって全国支配を貫徹して行ったのである。このことは、地方の有力者にとって、非常な栄誉であり、彼の地位を保障する手だてとなったのであるが、単にそれだけではない。寺院の建造という大事業を起こし、この事業に地方の人民を結集することは、弛緩した共同体的秩序を再編し、天皇のミコトモチとして、地方首長が新たな権威を固める最も有効な手段であったのである。また、公地公民制の強化に対処して、地方首長が私財を蓄積して行く手段としても、寺を持つことは有効であった。広大な寺田の保有が可能になるし、僧尼には免税の特権が与えられたからである。

海会寺の建設に際しては、自然地形に徹底的に手を加え、低い部分は膨大な土砂を投入して整地していたことも、今回の調査で明らかにされた。ところで、その整地層の中からは、少量ながら寺院創建以前の遺物が混入して発見されている。縄文土器片もわずかながら見られた。付近には今のところ、確実な縄文遺跡は知られていない。泉南の良好な縄文遺跡<sup>59</sup>としては、泉佐野市の三軒屋遺跡<sup>59</sup>があげられる程度である。まだ他にも未知の遺跡があるであろうから、三軒屋から運ばれたとは断言出来ないが、海会寺跡出土の少量の縄文土器片は、どこか遠くから運ばれてきた可能性もあると、私は思っている。もしそうなら、これは極めて重要な慣習が存在していたことを示唆する。

聖武天皇は、有名な大仏造営の詔の中で、「たとえ、一握りの草、一すくい<sup>60</sup>の土を持って来るだけでも、その人は朕の智識に参面することになるのである」と述べている。寺院建設の仕事に奉仕することは、民衆にとっても単なる強制労働ではなく、智識（仏教に帰依し、その功德を得ること）になるのだと、意識ないし意識させられていたのだ。基礎工事に動員された人々は、それぞれが自分の村里の土を、一すくいづつ持参し、智識に預かろうとしたのではなかろうか。土をすくった場所が縄文遺跡であれば、土器片が混入してもおかしくはない。

この推測が正しければ、寺跡から出土する、創建以前の少量の遺構を伴わない遺物類は、大変重要な意味を持っていることになる。その遺物と、その廻りにあった土の分析を行い、



搬入先を突きとめられれば、地方寺院がどれだけの範囲の民衆を募って建設されたものかということも、具体的に解明出来るかも知れないのである。

### 仏教の新しい展開

古代寺院は、民衆を共同体的イデオロギーの束縛から解放させない手段として建設された側面があったことを見逃してはならない。しかし、一旦、仏教に触れた民衆は、支配階級の思惑とは無関係な動きをみせはじめる。8世紀の行基の活動は、その最も華々しい発露であった。行基に縁がある堺市土塔町の大野寺からは、多数の人名瓦が採集されている<sup>⑧</sup>。地方首長層から庶民の女達まで、和泉や河内のあらゆる階層の人々の名が見られる点で、それは極めてユニークなものである。共同体、つまり氏族制的な枠を乗り越えて、個々人が、信仰に根ざして、行基の下へ参集していったことを、これらの文字瓦は雄弁に物語っている。行基とその衆徒が、一時は不穏分子として国家から排斥されたのも当然であった。その行基は、一つは信仰そのものから、一つは布教の手段として、社会事業を盛んに行った。久米田池や鶴田池などの池溝の開発もその好例である。

その際、彼は隆池院や鶴田池院を必ず置いたらしい。これは、開発に当たって信者の自発的労働奉仕を求めるためにも、開発された施設の維持管理のためにも、欠くことが出来ないものであつと思われる。ただし、このような院は海会寺のような本格的大寺院に比べれば、貧弱な仏堂ではなかったかと推量される。何故かといえば、それらの施設は未だにその遺構がはっきりとは分かっていないからである。隆池院は、久米田池畔に今日も久米田寺として往年の繁栄の名残を留めているが、8世紀の遺構は明らかではない。

また、8～9世紀になると、山里に隠棲し、あるいは諸所を遍歴して修業する聖僧が増えたらしい。こういう人々が行い済ますにふさわしい簡素な仏寺も、当然増加してきたに違いない。9世紀以後、仏教が衰微したりしたわけでは決していないが、仏教者とその信仰形態は大幅に変化しだしたのである。こうして登場した、地方の新しい仏堂は、信仰本位の簡素なものであり、瓦などを用いることも希であったため、それらの遺跡を突きとめるのも困難なのではなかろうか。9世紀頃から、はっきりと歴史の舞台に登場する富豪層も、多くは仏教に帰依していたと考えられる。彼らの中には、自邸の一隅に仏堂を営んだ者も多かったに違いない。密教の興隆はこのような新しい仏教の傾向を助長するのに、大変有効に作用した。というより、社会的な要求が天台宗・真言宗の勃興をもたらした、と言ったほうがよいかも知れない。

古代寺院の荒廃は、仏教そのものの衰退を意味しているのではなく、古代国家権力機構の一翼を担うモニュメントとしての壮麗な伽藍の存在意義が薄れだしたに過ぎない。地方の有力者たちは、国衙の官人に列し、あるいは中央の権門と縁故をむすびつつ、中世領主制



の方向を模索し始める。『宇津保物語』吹上(上)・(下)の巻に描かれている神南備の種松の姿は、地方の富豪層の10世紀における理想像と言うべきものであろう。この話は、吹上という美景が、物語の第2のヒーローである、源涼を登場させるにふさわしい舞台として設定されているだけかも知れないが、吹上が紀伊(和歌山湾岸)にあることは、やはり、注意しなければならない。等しく地方といっても、京都の貴族達が気軽に旅行出来る範囲にあった和歌山とか明石(『源氏物語』)辺りまでは、政治的にも、経済的にも、文化的にも京都との関係は密接であり、それがこれらの地方の中世への発展に、他の地方とは異なる特色を付与したことは否定出来ない。

栄原永遠男氏の研究によると、紀伊国は、国司にとって、あまり実入りの多い国ではなかったらしい<sup>⑥</sup>。それと神奈備種松の豪しゃとは矛盾するようであるが、そうではない。有勢者が、王朝の大貴族達と個別に縁故を結んで、在地領主として栄え、多角的な手工業経営をこもごも展開するような地方では、国衙収入は相対的に低落するのが当然である。紀伊とはそういう地方であったからこそ、『宇津保物語』の作者は、この地方に舞台を設定したのであろう。その隣国で、より京都に近い和泉も相似た情況であったに違いない。しかし、種松は紀伊守になった後も、自らが養育した涼とその姻族の正頼一家にひたすら奉仕するのであり、明石入道のごときは、光源氏の女子(明石女御)を産んだ娘(明石の上)の身分の低さをおもんばかりで、山寺へ隠棲してしまっている。権門への卑屈なほどの隷従は、10世紀までの地方富豪が、まだ自己を主体的に確立出来ないでいる姿をほうふつとさせる。彼らが、はっきりと自立しだすのは11世紀以降を待たなければならないのである。

仏教史の新しい展開に関しては、なおこの他に、神仏習合の発展に伴う神宮寺の隆盛を指摘しなければならない。和泉の神宮寺としては、大鳥神社の神鳳寺や、泉穴師神社の薬師寺などが著名であるが、後者の一部が調査されている程度で、詳しい研究はまだ進んでいない。逆に、寺院の境内にも神社が付設されるようになった。その先駆は、東大寺の若宮八幡宮であるが、一岡神社も海会寺の寺内社であったものが、平安期以降、寺に代わって尊崇されるようになったものかも知れない。この他、神社と寺とがセットをなす例としては、泉佐野市の日根神社(大井堰神社)と慈眼院、泉南市の信達神社と金熊寺などがある。

和泉の寺院で、今一つ、注目しなければならないのは、山岳仏教並びに修験道に関する遺跡が多いことである。現代では、金剛・葛城山脈と和泉山脈は、別個の山脈として、区別して意識されているが、昔は、役の小角にまつわる葛嶺二十八宿の一連の修験の行場であった。現存する寺院も多い。古瓦から8世紀までさかのぼると考えられる松尾寺(和泉市)、空海が得度したとされる槇尾山施福寺(和泉市)を始め、牛滝山大威徳寺・神於寺(岸和田市)、孝恩寺・水間寺(貝塚市)、犬鳴山七宝滝寺(泉佐野市)、金熊寺(泉南市)等、その





図6 『和泉名所図会』にえがかれた金熊寺

数は甚だ多い。

これらの寺々の中には、8世紀以前に創建されたものもあるに違いないが、7世紀代の海会寺などとは、寺の性格も創始の目的も異なり、むしろ古代末以後の信仰に根差して建造されたものとみられる。こうして、仏教は地域社会にしっかりと根づき、地域文化を豊かに育んで行ったのであるが、瓦葺きの寺院が激増しだす

のは、11世紀頃からのことである。この現象は、時代がはっきりと中世へ動き始めたことを示す一つの徴表として、注目しておきたいことである。

中世といえば、和泉では泉佐野市の日根野が中世そのままの面影を大変よく留めているのであるが、新空港関連の道路建設等で、その見事な環境が今まさに滅失されようとしているのは、胸が痛むことである。地域の誇る文化財や歴史的風物を大切に守ることは、住民自らがその郷土を愛し、文化的で住みやすい故郷を、主体的に育んで行く上で、極めて大切なことである。泉南市が海会寺跡を整備する事業を推進しているのも、明日の泉南市の豊かな発展に、郷土の史跡の顕彰は、何を措いても不可欠な、教育文化行政の一環であるからに他ならない。本稿は古代和泉を主題にしたものであるから、中世のことは別の機会に譲るが、思えば、海会寺創建によって、始めて高度の文明が当地に開花したのであった。言い換えれば、その後の泉南の歴史は、海会寺を生み出した技術、財力、創造力を原点として、その伝統に学びつつ、絶えずそれを超克して、中世へ、さらに近世へと発展してきたのである。そして現代があり、私達は今、未来への夢と希望を膨らましている。海会寺跡の史跡整備も、そのための大切な事業の一つである。この大事業に参加させて頂いたことを喜びに思いつつ、ひとまず筆を措くこととする。

註 ① 記紀には「茅渟」の他、「珍」「珍努」「血沼」等、色々な当て字が使用されているが、いずれもチヌという発音を表現したものと考えられる。大阪湾は茅渟の海と言われていた。

② 『続日本紀』霊龜2年3月～6月にかけての項に、関係記事がある。

③ 『同上』養老元年(717)～天平16年(744)の記事には、和泉宮・和泉離宮・智姿離宮の語がみえる。神龜元年10月の条には、「和泉国所石頓宮」というのが見えるが、これは現高石市取石付近に設置された臨時の仮宮なのであろう。

④ 『同上』天平12年8月20日の記事に「和泉監并河内国」とある。

⑤ 『同上』天平勝宝9年5月8日の条。

⑥ 「終末期」という用語が流行しているが、「後期末」と表現したほうがよいと考えている。



- ⑦ 大正期から著名な遺跡であるが、近年は第2阪和国道遺跡調査会や堺市教育委員会から数々の報告書や概報が刊行されている。
- ⑧ 泉大津高校地歴部・第2阪和国道内遺跡調査会・和泉市教育委員会等から多くの報告書・概報が発表されている。
- ⑨ 泉佐野市教育委員会の鈴木陽一氏の教示に因る。
- ⑩ 後掲註⑤⑨参照。
- ⑪ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』・『同』Ⅱ・『同』Ⅲ(泉南市文化財調査報告書第二～四集)1978～1982。
- ⑫ 堺市教育委員会『鈴の宮』Ⅲ(堺市文化財調査報告第11集)1983。
- ⑬ 信太山遺跡調査団『信太山遺跡調査概報』1966。和泉市教育委員会『鶴山地区信太山遺跡(その2)調査概報』1970。
- ⑭ 鈴木博司・森浩一「大阪府観音寺山遺跡」『日本考古学年報』21・22・23、1981。
- ⑮ 石部正志編『岸和田市史』第1巻(考古編)1979。その後、岸和田市教育委員会の近藤利由氏が一部を発掘し、竪穴住居址群を検出している。
- ⑯ 宅地造成に伴う事前調査を竪田直氏が行い、10数棟の竪穴住居址群を全掘しているが、未報告。
- ⑰ 1986～87年、新空港関連道路工事に伴う事前調査を大阪府文化財協会が実施、丘陵の尾根筋から麓にかけて竪穴住居址等を検出中である。
- ⑱ 石部正志『岸和田市史』第1巻(考古編)。
- ⑲ 註⑱参照。
- ⑳ 註⑱参照。下池田遺跡では1986年度の調査で前方後円形周溝遺構などが発見されている。
- ㉑ 府道池上一下の宮線予定地に係る試掘調査を大阪府教育委員会が実施。
- ㉒ 泉大津高等学校地歴部『和泉信太千塚の記録』1963。
- ㉓ 末永雅雄・嶋田暁・森浩一『和泉黄金塚古墳』1954。
- ㉔ 註⑱参照。
- ㉕ 石部正志「近畿地方の巨大古墳」『巨大古墳と倭の五王』青木書店 1981。
- ㉖ 堺市教育委員会『船尾西遺跡発掘調査抄報』1978。
- ㉗ 森浩一・田中英夫「堺市浜寺石津町遺跡概報」『古代学研究』第9号1954。
- ㉘ 森浩一「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』第1巻 古代編1 大阪府 1978。堺市教育委員会「大塚山古墳」『昭和57年国庫補助事業発掘調査報告』1983。
- ㉙ 石部正志「畿内の巨大古墳と倭の五王の世紀」『ヒストリア』90号 大阪歴史学会 1918。同 註㉚文献。
- ㉚ 註⑱参照。
- ㉛ 森浩一「大阪府堺市塔塚古墳」『日本考古学年報』12 —1959年度— 1964。
- ㉜ 吉田恵二「埴輪生産の復原一技法と工人」『考古学研究』75 1973。
- ㉝ 森浩一 註㉞文献参照。
- ㉞ 「新家古墳群(泉南市)発掘調査の成果」『大阪府教育委員会月報』23—1 1971。
- ㉟ 藤沢一夫「玉田山上方下円墳—泉南郡東鳥取町自然田—」『大阪府教育委員会月報』18—3 1966。阪南町教育委員会『玉田山遺跡発掘調査報告書』1982。田中英夫他『阪南町史』上巻 1983。
- ㊱ 泉南市教育委員会『泉南市向井山遺跡発掘調査報告』1972。
- ㊲ 「大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査」1『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』3 1932。川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』8 1977。大阪府教育委員会『淡輪遺跡発掘調査概要』1982。石部正志 註㉞文献。
- ㊳ 末永雅雄『日本上代の甲冑』創元社1944。大阪府教育委員会「西小山古墳の調査」『大阪府の文化財』1962。
- ㊴ 『日本書記』雄略9年夏5月条。
- ㊵ 帝塚山大学考古研究室『白峠山古墳調査概要』1968。



- ④① 磯山古墳群調査会『淡輪磯山古墳群』摂河泉文庫 1980。
- ④② 京都大学文学部考古学研究室『大谷古墳』便利堂 1969。
- ④③ 関西大学文学部考古学研究室「和歌山市における古墳文化」『関西大学文学部考古学研究紀要』第4冊 1972。河上邦彦「晒山古墳群(第1次調査)」『同(第2次調査)』『日本考古学年報』21・22・23 (1968・1969・1970年度版) 1981。
- ④④ 樋口隆康他『和歌山県文化財学術調査報告』第2冊 1967。
- ④⑤ 河上邦彦「和歌山市楠見遺跡」『日本考古学年報』21・22・23
- ④⑥ 藤井保夫「古墳時代の紀伊」及び巻頭図版『古代を考える』33 1983。石部正志「畿内からみた和歌山の古墳文化」『和歌山地方史研究』12 1987。
- ④⑦ 和歌山県文化財研究会「秋月遺跡発掘調査現地説明会資料」『和歌山地方史研究』12 1987。
- ④⑧ 山田良三『考古の旅 5 近畿北部編』明文社 1975。
- ④⑨ 長原遺跡調査会『大阪市平野区内長原遺跡発掘調査(資料編)』1976。大阪府教育委員会『長原遺跡現地説明会資料(Ⅲ)』1977。その他。
- ⑤⑩ 大阪府教育委員会『禅寂寺(坂本寺)跡調査概要』1966。
- ⑤⑪ 大阪府立泉大津高等学校地歴部『和泉信太千塚の記録』1963。
- ⑤⑫ 同上『信太山聖神社一号墳』1965。
- ⑤⑬ 湊哲夫「吉備氏反乱伝承の再検討」(報告及び討論)『古代を考える』31 1982。
- ⑤⑭ 高尾一彦「豊臣秀吉と大阪築城」『大阪府史』第5巻第1章第1節 1985。
- ⑤⑮ 関西大学考古学研究室『花山西部地区古墳』1967。和歌山市教育委員会『岩橋千塚』1967。
- ⑤⑯ 註④⑥藤井報告、註⑤⑮参照。
- ⑤⑰ 森浩一「大阪市域の古墳」『大阪府史』第1巻第3章第2節 1978。堀田啓一「住吉周辺の考古学散歩」(一)～(七)『すみのえ』152～158号 1979～1980。
- ⑤⑱ 『日本書記』天武元年7月条。同2年5月卒、小紫位を贈られる。
- ⑤⑲ 泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡—昭和54年度の調査—』1980。「三軒屋遺跡」『泉佐野市所在遺跡発掘調査概要』Ⅰ・Ⅱ 1981、1982。
- ⑥⑩ 森浩一「堺市土塔町大野寺出土の文字瓦資料」『古代学研究』12号 1955。
- ⑥⑪ 柴原永遠男「律令時代紀伊国における経済的發展」『古代を考える』33 1983。